

寛永諸家譜

清和源氏甲九冊之内  
義家流之内新田流

内閣文庫			
番號	和	20199	
冊數	186	(	8)
函號	特	76	1





松平 附小栗中目小次

寛永諸家系圖傳

清和源氏 甲五

義家流

松平

信忠康流

● 信忠

● 清康

淺草文庫

信孝 ふたけ

藏人 くらひん

天文十七年四月十日之別荘生たふり

おわく失やりあつて死しす

法名 普岳通ほうみやう けいごく とうき

重忠 しげただ

九郎七衛門

三列さんれつの生なまれ

東照大権現とうしょう だいこんげんより生なまれ

天正十八年

大権現だいこんげん東照とうしょう入國いりくにの時

信母しんぼより大おほ

法書ほふしょ乃頭のらうとす

孝たか長なが去き年ねん十二月二日死し去き十二じふに

法名通徹ほうみやう とうてつ

忠清 ただひら

与十郎

生國なまくに同前

台徳院たいとくゐん殿のり法ほふ切きり少せうの時ときを列れつ漢ま松しょうより

久しとまらふ

寛永六年大沙着の歿と云ふ

同六年十二月二十二日死と二十二歳

法名長壽

忠利

九郎右衛門 生國同前

十六歳より

大権現におよそとまらふ十歳より

台徳院殿より

寛永六年三回陣より

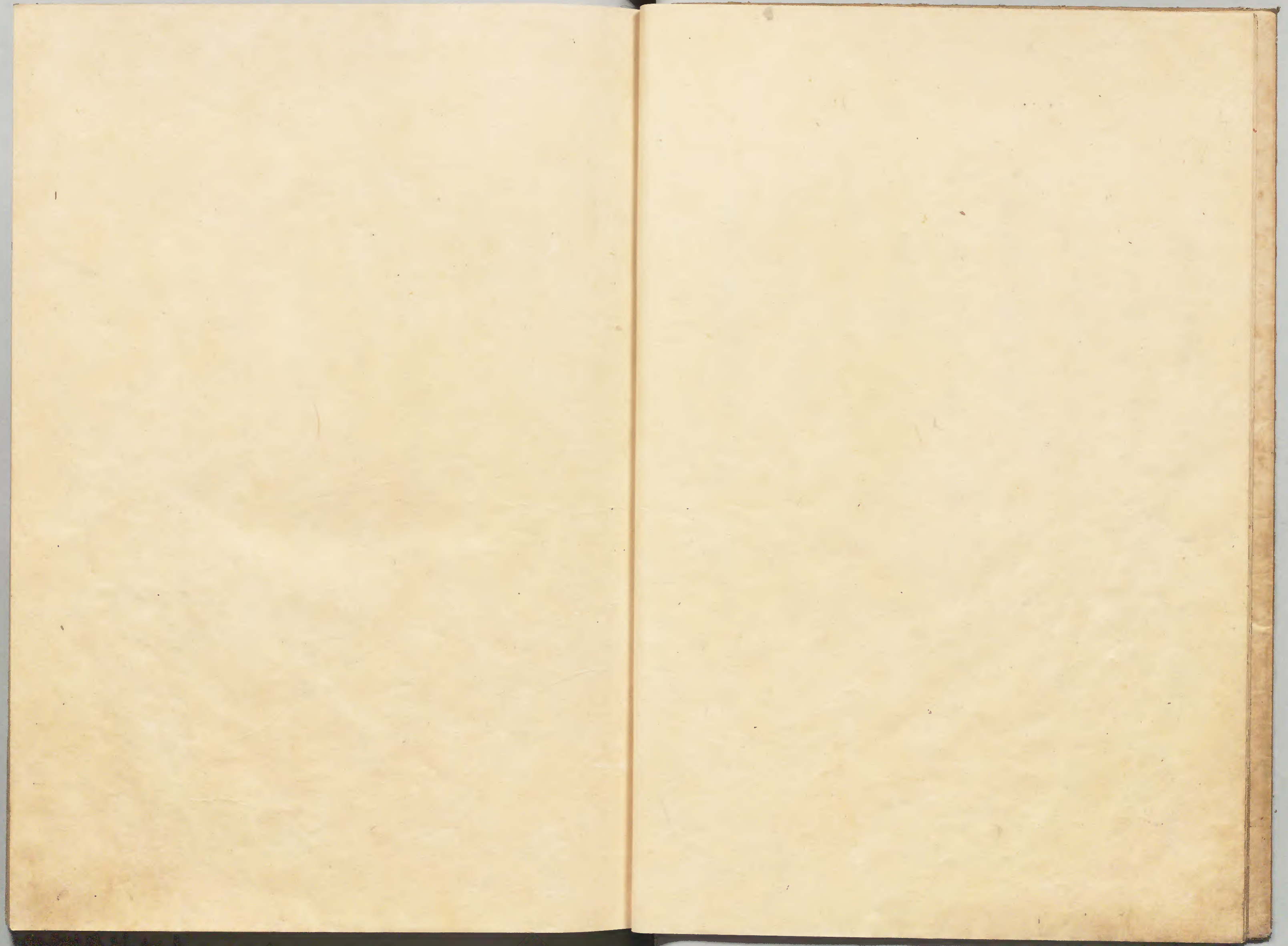
重利

与十郎

寛永十一年二月十一日

將軍家におよそとまらふ

忠利家紋 漢字



松平文流

長澤海

今案に於て松平の姓を以てし居

りし者も或は信光の子源七郎

と云ふは信光の子又案に於て信光自

の弟は信光の子と云ふありし

源七郎と云ふは信光の子と云ふありし

或は信光の子と云ふありし

あるは信光の子と云ふありし





親孝 りき

清田部 きよ

生田回前 うぶ

清名清威 きよ

親宅 りき

清茂 きよ

生田回前 うぶ

清名念誓 きよ

東照大権現よつへてよつりて之別也 あづま

よあわく清代官とけり守るべき

親正 りき

清田部 きよ

生田回前 うぶ

右徳院殿

將軍家よりけりて遠別 とほ

あわく清代官とけり守るべき

正信 まさのぶ

戸一郎 と

生國同家 うぶくにん

寛永十年 かんえいじゅうねん

將軍家と評 しやうぐんか

同十二年 狗命 いぬのいのち 母より天降書 あまのふりかき

某 なにか

源七郎 げん

上野介 うぶのすけ

江名源 えなげん

某

源七郎

上野介

二列 ふたはら 忠次 ただつぐ 信 のぶ

江名源 えなげん

某

源七郎

上野介

江名源 えなげん

某 ミヤ

源七郎 ゲンシロウ

ありて家とつては成持と云ふ

しりて

大徳院の御貫息松千代丸 おほとくゐんのみつみきまつちよゝ 信子 のぶこ

忠輝の家とつて松千代丸の母の

忠輝と云ふ母の家の督と云ふは

近清 チカキヨ

近清門尉 チカキヨカドモリ

信名 のぶな

信直 チカナオ

近清門尉 チカキヨカドモリ ありて田子の段の

松平源七郎につて源七郎死すの

去平松千代丸と云ふは信直忠輝と

よつと

元和二年忠輝と云ふは改易のち

出づ

台徳院殿了了之

信須

信十郎

勝直

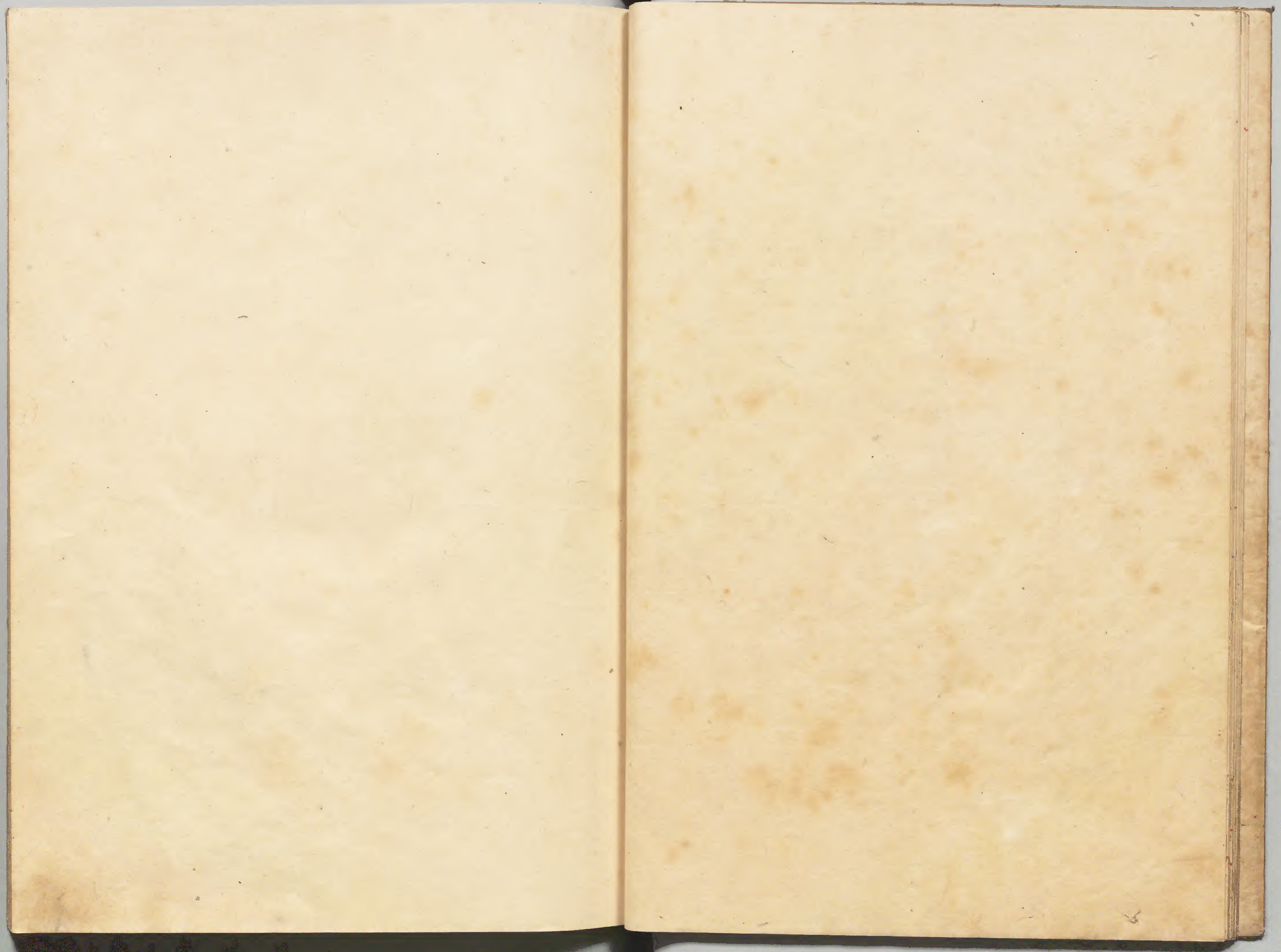
新平

元和九年十六年

寛永十六年 狗命

か

信須家紋田丁子  
正信家紋凡内行



● 信重 のぶしげ

松平

孫七郎 信光の子息松平孫七郎

冬別長沢の信と信重は此後流る

天文の乱の信重 廣忠卿の殿して

軍忠あるゆへ其功を賞じて知りた

まの御書にあり

と度々申すかゝるが御書に

信次ふた

八三藩

生國冬河なまごくに

中曾の武治少正の東路の卿の内  
を福も領を金もおまけに有る相  
遠平の如く如行

天文十又

二月十日

廣忠少判

中次孫の如く

信宗ふね

甚長おん

生國同前

信直ふた

甚長

生國同前

信勝ふた

信之部

生國越後なまごくに

家紋藤丸  
よのぢん  
このすま



松平

某 カ

總之即 ト

生五卷河 カ

東照大権現ノシノカ

長次 カ

古京 カ

生國同前 カ

大権現ノシノカ

寛永又二月十六日死  
法名淨庵

長吉

七歳

生國同前

大徳院

名徳院

將軍家より侍人

長正

十九歳

生國武列

實田中丞次郎 後より中丞次郎 義忠の子

川外紀又忠京長吉や侍人の子

元和二年十一月十九日

將軍家より侍人

貞長

次郎右衛門

生國冬河

將軍家より侍人

いへ

いへのりんはらたのり

家紋一巻

某

春之節

生國同前

江名淨真

某

春之節

生國冬河

江名淨光

松平

東照大権現より所へもつたもの  
台徳院殿より所へ

重忠 ムカシ

右之部 ミナ

生國田前 ムカシ

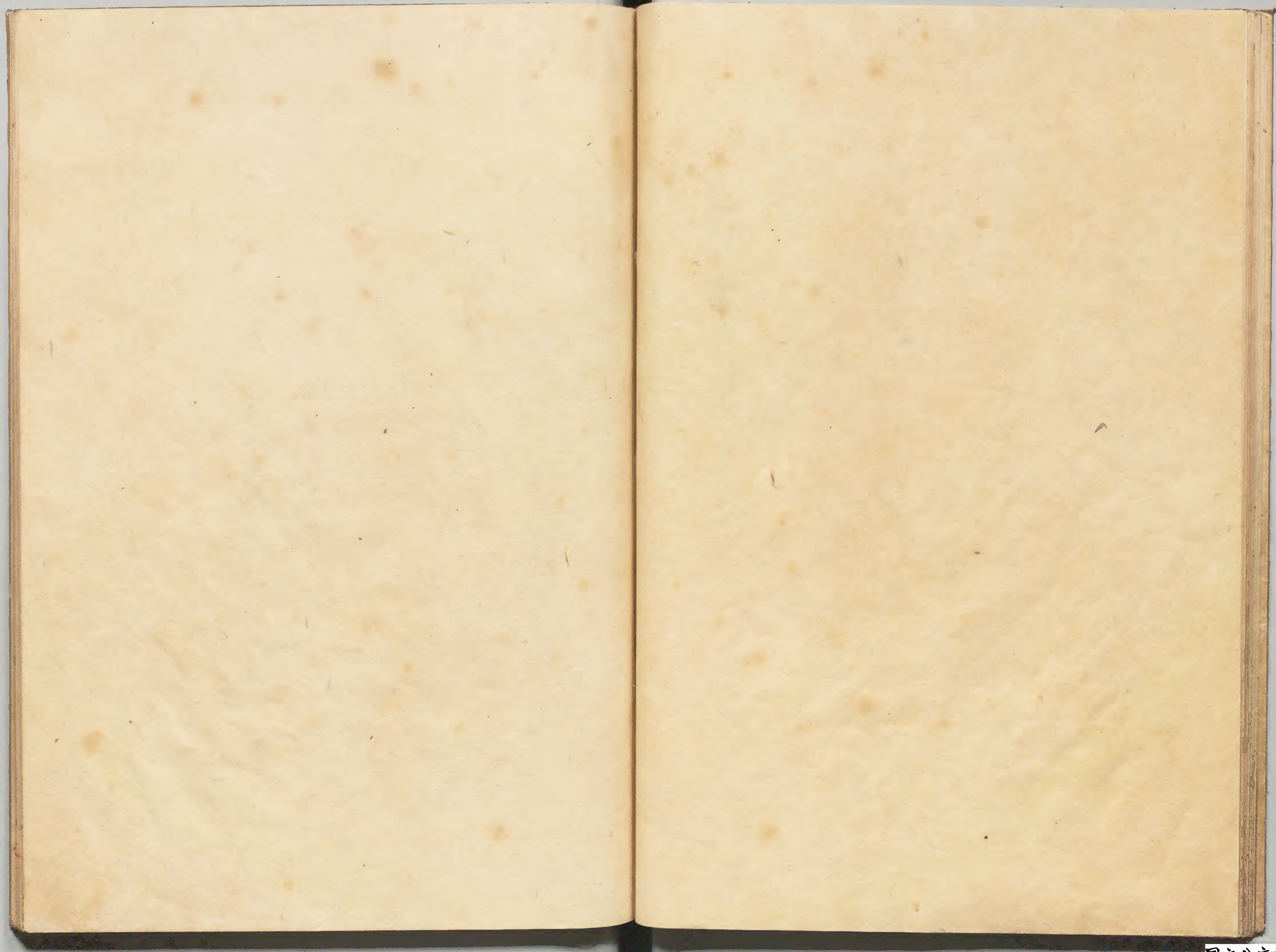
台徳院殿より所へもつたもの

重俊 ムカシ

右之部

生玉相模 ムカシ

將軍家より所へもつたもの



● 清吉

きよよし

越後守

えちごのり

主事冬列人なり

しゅじゆふりゃくにんなり

松平

清忠

きよただ

凡

こと

清政

与右衛門

東照大権現（一）に人（二）を（三）し（四）る（五）系

享保八年十月死（一）と九十七（二）歳

通名清玉と号（一）し（二）る（三）

政重

右衛門

生國遠別

大権現（一）に人（二）を（三）し（四）る（五）系

大坂陣（一）の河河部（二）海守（三）くみ（四）り（五）属（六）

一（一）て首級（二）と得（三）たり（四）

重勝

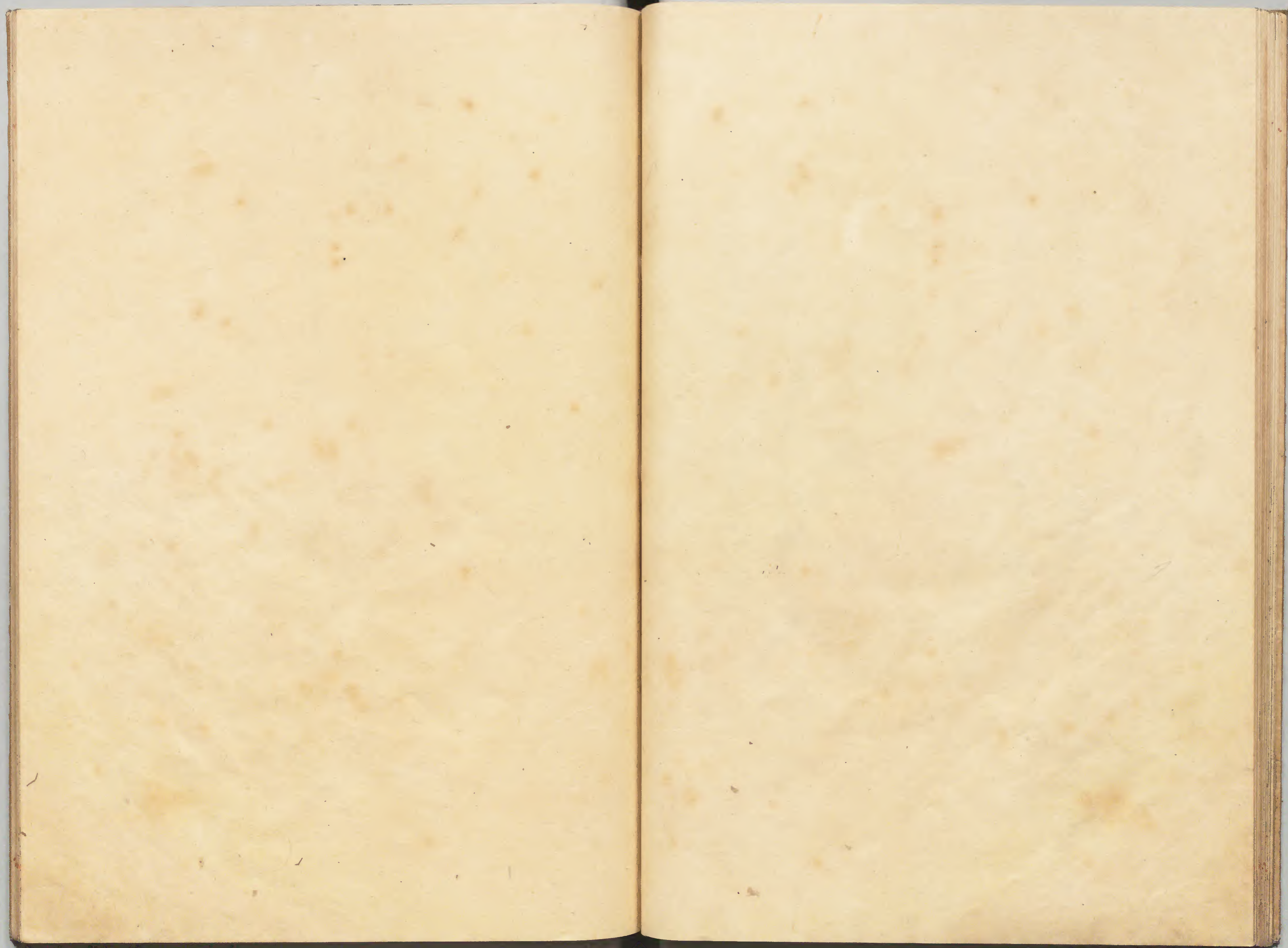
市郎左衛門

生國冬河

台徳院（一）及（二）よ（三）つ（四）て（五）人（六）を（七）し（八）る（九）系（一〇）

家紋（一）丸（二）内（三）一（四）星（五）





● 某 あな

松平

四郎右衛門尉

あつた  
主事人冬別後生人

東照大権現了  
しんくふりまつた

政次 まさつぎ

小右史 こさふみ

生玉冬何 なまたまふゆい



改長 まこと

丸巻

將軍家よりけりてまづりし御書後書 あきま

とつとむ

改膳 まこと

新九郎 しん

生玉巻 まこと

將軍家よりけりてまづりて九百名の地帳 ち

家紋九回一文字 い

● 某 カ

松平市郎

生國冬列 えいこくとうりつ

小栗 こぐり

某

又市 またいち

仁右衛門

生玉同前 きうぎどうぜん

松平氏 まつらへいし ともあつたため母の氏よりて小栗

と号して

天正二年九月十一日死去六十四歳  
法名宗善

忠政

又市

生國同前

東照大権現よりけりて後番とつと  
之は大河番乃駒と名り又河鉄砲  
より

元龜元年姉川合戦の時七歳  
軍功あり

同二年味原合戦の時

大権現の御馬のきり紙を  
天正二年も藤合戦の時  
りて其首を得たり

大権現田中乃城とせりて酒井五郎  
旧者其大権現の御馬小次郎并忠政等  
おもひておとりに城の池れからみたり敵

の兵よまじりてかゝるにあらざらんといふに  
乃ちけがしめ城中へ志の兵入るに時を政  
爲らば度おこしむるも軍はしむる  
合戦二年のあひだ忠政は人となり横濱城  
より居て親度の徳とあはすの場ゆきせ  
しよのとき一番は徳とあはすすべしと度  
の名とあはす忠政つひにわづらひし  
しよのとき一番は徳とあはすすべしと度  
しよのとき一番は徳とあはすすべしと度

と稱美とさふありありと徳の河生捕得  
しよのとき一番は徳とあはすすべしと度  
しよのとき一番は徳とあはすすべしと度

大権現へ言と一はしよのとき一番は徳とあはすすべしと度  
天正十二年も久し合戦のとき忠政は徳の  
を徳とさふ又徳とさふありありと徳の河生捕得  
しよのとき一番は徳とあはすすべしと度  
しよのとき一番は徳とあはすすべしと度  
しよのとき一番は徳とあはすすべしと度

大坂陣のとき鉤命をうけて先づ(覺)

元和二年九月十八日六十二歳と病死  
法名源室宗中

音次

基丞

生國を別

享和十一年二月二日二歳と病死  
法名宗中

音忠

八十郎

生國を別

政信

又市

十四歳のとき

名徳院殿と許しをうけ

享和元年真回陣の時



名徳院後の信奉と

大坂陣に信奉し落城の時三九

すみいつく軍功を劾し時を回長久

中止勅命由し田十久更第一取あり

信由

仁左衛門 生國後河

大権現へ沙小姓ゆへにをふせのら所

贈書と 仰付し

其の昔十九年大坂陣に信奉し其

記

大権現作之る将監と信由あり

伊達政宗陣中の旗と其く

釣命と影と坂陣取へおひま

と意のひいとけ

元和元年大坂陣の時信由は天

口東のよよむる其時り

大言新助もいひ政信信由小坂遠し

信政の忠告人として信政の場をいふこと  
 ていられし時小幡遠江守家人新女  
 らし政信信由二人よびひきまゐりの證  
 據よしてとらざるありし時必は文  
 文字の指也といふ信由の地ありし五  
 甲ん乃とていふはもと又新助の地あり  
 ありて頼宣の地は後小幡守の地なりと  
 号しと

信政

新助

信友

又新助

忠次

半右衛門

忠勝

新助

信勝 ふら

唐次郎 しやう

生國成茂

信房 ふら

勘八郎 かん

生國成茂

寛永六年 かん

將軍家と評し しやう

同十四年 伊予の藩 いよ

家紋立波 いへの

義長

本目

冬列松平集人下の図教め大絵の  
末子なり

松平集人

生國冬列

天正十八年八月十八日卒七歳なり死す  
法名常盛

義正

松平権十郎

生國目筋

大権現をおくも、若年の時松平肉防

より、其後、常人となりて伊豆國了

之、年終、時、石川日何、小田原

陣より、石川日何、箱根への道の業

志となりて、中め、この名あり

大権現の仰み、本月、梅号と

寛永八年十一月十八日七十二歳歿

法名常真

正重

権十郎

生國目筋

大権現

名徳院殿と評し

寛永六年二月十四日、年九歳より歿

法名源枕

正次

権十郎

生國次郎

寛永七年正月十八日

將軍家におゝる御書に御督と申す

同十二年より御書におゝる

正義

権十郎

生國次郎

祖父義正の書子と申す

寛永七年

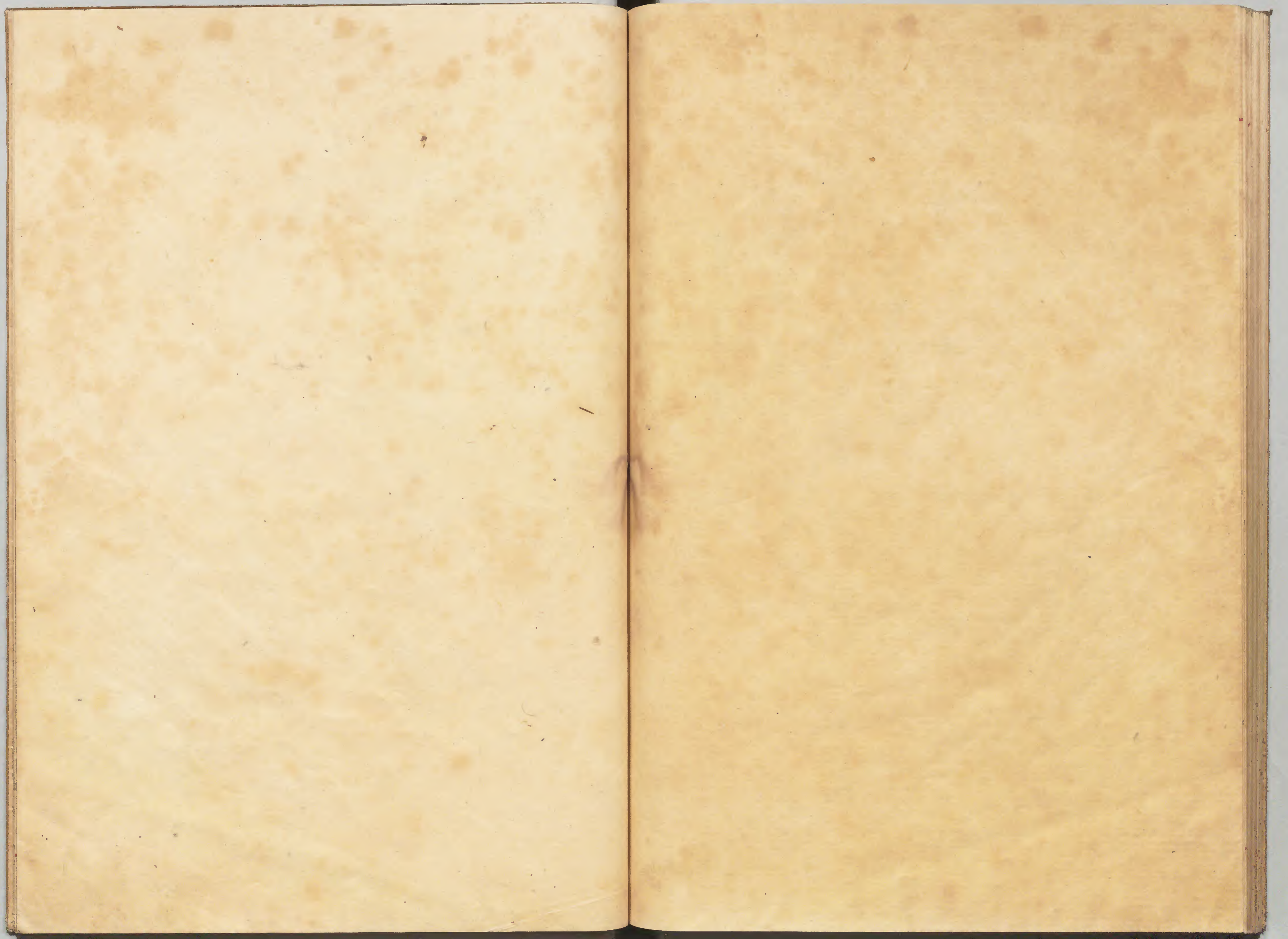
將軍家におゝる

同十一年正月十二日 台命より御書

御督と申す

同十二年より御書

家の紋桐環



● 重吉

小沢

初ハ松平後ヨ小沢とありたむ代ハ書家  
の伊左衛門トシテ

松平次郎右衛門 生國冬列野見

重吉ハ松平光親の孫ナリ重吉ハ其の孫也

此ハ其の孫ナリ松平の譜中ニ入ルナリ

天正八年八月二十七日冬列野見ヨおぬ死



法名清久

某

十年

忠重

小沢源兵衛

生田四郎

永井右近守あまのたよ兄長田久右衛門あまのわた妹いもははて家督いへとついではは長田ながたとついではは後のち

大権現の位おほごんげんの位ゐりて小沢とあはたむ

天正十二年てんしゅうじふにねん長久ながく右衛門ゑもんの位ゐ奉たてまつりて

とあ

寛永六年かんえいごくねん冥系めいけい源陣げんじん

同十九年どうじゅうくねん大坂源陣おさかげんじん

台徳院殿たいとくゐんの位ゐ

寛永八年かんえいはちねん二月二十日にふにじゅうにち卒す七歳ななさいで死し

法名ほふな専英せんえい



